

## 家庭科の男女共修に関する中学生母親の意識

太田昌子\* 持田聡子\*\*

Masako OOTA and Satoko MOCHIDA  
Junior High School Students' Mothers' Opinions  
and Consciousness of Coeducation of Home Economics

**Abstract :** This investigation was made to clarify students' mothers' opinions and consciousness of the coeducation of home economics in the junior high school which started with the revision of the course of study in 1980.

As the results, we recognized that fairly many of the mothers had the affirmative opinions of the new situation, while we also recognized that they desired home economics to include some teaching materials exclusively for either sex.

### 緒言

戦後昭和22年に誕生した新生「家庭科」は、民主的家庭の建設者を育成することが第一の目標であった。しかしその後、高度経済成長時代にはいと、科学技術振興の波に洗われて、男女の特性のちがいを強調した、男女別学の「技術・家庭科」へと転換し、昭和55年の学習指導要領の改訂に至るまで、共学の道は閉ざされてきた。

ところで、一般に家庭科には「家事的教科」という固定観念がある。しかし学校教育としての家庭科は、単に料理や裁縫を教えるためにのみ存在するのではなく、全人教育の一環として、人間がより人間らしく生きるために必要な知識や技術を習得させ、家庭生活はもとより、生活全般に対する理解を深めさせると同時に、生活者としてのあるべき態度と能力とを身につけさせようとするものである。このように家庭科をとらえるとき、女子だけに学ばせるのでは不十分であり、男子にも生活者としての自覚を高めさせるため、家庭科を学ばせる必要があると考える。

また近年は女性の社会進出がめざましく、それに加えて家庭や社会における男女平等を実現しようとする気運が高まり、「男は仕事、女は家庭」という伝統的性別役割分担意識も次第に薄れつつある。このような男女平等

に関しての正しい理解を植え付けるためにも、家庭科の男女共修は意義あるものとする。

従来は小学校家庭科のみ男女共学であったが、昭和55年の学習指導要領改訂により、中学校技術・家庭科において、男女相互乗り入れという形で、一部ではあるが家庭科の内容の男女共修が実現することになった。こうして男子も家庭科を履修するのは、昭和35年までの「職業・家庭科」以来20年ぶりのことである。

このような新しい事態に対処し、それを成功させることは、いまのわれわれ家庭科関係者に課せられた重大課題である。そしてその成功のためには、中学生はもとより、教科の性格上特に理解と協力を求めなければならない母親たちの意識を把握しておく必要があると思われる。以上のような考えに基づき、われわれは中学生及びその母親の、技術・家庭科男女共修に関する意識調査を行ったが、今回は特に、母親の意識を中心としてその結果を報告する。

### I 調査方法

1. 調査対象 表1の通り、松江市内の二つの中学校の1年生男女とその母親である。これらの対象者の居住地、年代、家庭の職業状況は図1の通りである。
2. 調査方法 質問紙法（無記名）による。
3. 調査時期 昭和55年9月下旬～10月上旬
4. 調査内容 概要はおよそ次の通りである。

\* 島根大学教育学部家政研究室

\*\* 雇用促進事業団島根心身障害者職業センター

表1 調査対象

学校名・学年	男子			女子			計		
	配布数	有効回収数	有効回収率	配布数	有効回収数	有効回収率	配布数	有効回収数	有効回収率
松江市立第三中学校1年生及びその母親	41	40	98	41	41	100	82	81	99
松江市立湖南中学校1年生及びその母親	247	200	81	215	196	94	462	396	86
計	288	240	83	256	237	95	544	477	88

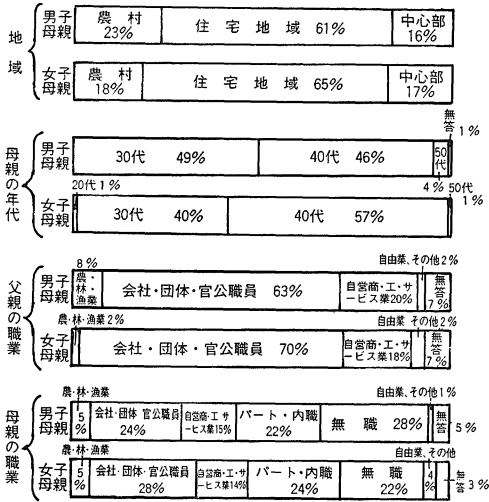


図1 調査対象者の居住地・年代・職業別構成比率

- (1) 自己の家庭生活の実態及び家庭生活についての意識
  - 1) 子どものしつけ及び手伝いについて
  - 2) 夫の家事協力について
- (2) 技術・家庭科の男女共修に関する意識
- (3) 技術・家庭科「家庭系列」の男女共修に関する意識
  - 1) 男子の「家庭系列」履修に対する反応
  - 2) 「家庭系列」領域の中で、子どもに学ばせたい内容

## II 結果及び考察

1. 自己の家庭生活の実態及び家庭生活についての意識  
 このことについてまず「子どものしつけ及び手伝いに関する実態と意識」とを問うた結果は表2の通りであった。すなわち、(1)子どものしつけは「男の子」「女の子」で区別すべきかどうかについては、男子の母親、女子の母親共に、「ウ.時と場合により変えるべきだ」が約半数を占め、「ア.はっきり区別すべきだ」「エ.区別すべきで

表2 子どものしつけの実態と意識

問	選択肢	子の性別		有職・無職別		
		男 240人	女 237人	有職 328人	無職 127人	
(1)「子どものしつけは「男の子」「女の子」で区別すべきか」	ア. はっきり区別すべきだ	10.0%	8.9%	9.5%	8.7%	
	イ. 少しは区別すべきだ	26.3%	21.9%	25.9%	20.5%	
	ウ. 時と場合により変えるべきだ	47.9%	57.0%	51.2%	55.9%	
	エ. 区別すべきではない	14.2%	10.1%	11.6%	13.4%	
	オ. わからない	0.4%	1.3%	0.9%	0	
	カ. その他	0.4%	0.4%	0.3%	0	
	無答	0.8%	0.4%	0.6%	1.6%	
	(2)「たは家事」をさせようか」	ア. よくさせている	20.0	18.1	15.5	22.8
		イ. 時々させている	57.1	59.9	66.2	46.5
		ウ. あまりさせていない	18.8	20.0	15.9	28.3
エ. 全くさせていない		3.8	0.4	1.5	1.6	
オ. その他		0.4	0.8	0.9	0.8	
無答	0	0.4	0	0		
(3)「別すのべ手伝い」をさせようか」	ア. 男の子、女の子にそれぞれ向いた仕事をさせる方がよい	37.1	51.5	46.3	37.8	
	イ. 女の子だけ手伝いをさせればよい	0	2.5	0	0	
	ウ. 男女の区別はつけない方がよい	60.4	43.9	51.8	58.3	
	エ. わからない	0.4	0.4	0.9	0.8	
	オ. その他	1.7	1.7	0.9	2.4	
無答	0.4	0	0	0.8		

注：\* 印は比率の信頼区間法による検定の結果95%の信頼水準で有意差の認められたもの。表3, 表6, 表7も同じ。

はない」という極端な意見はそれぞれ約10%前後と少数であった。しかし全般的にみれば、「イ.少しは区別すべきだ」の約20%強も加え、母親の子どものしつけについての意識には、保守的傾向が少なからずみられるように思われた。そしてこの傾向は男子の母親、女子の母親間に差は認められなかった。

次に(2)子どもによく手伝いをさせているかどうかを問うてみると、「ア.よくさせている」と答えた者は約20%程度と少なく、「イ.時々させている」「ウ.あまりさせて

いない」者がほとんどであった。このことについても大勢としては男子の母親、女子の母親間に差はなかったが、ただ「エ. 全くさせていない」と答えた者が男子の母親に多く(3.8%), 女子の母親(0.4%)との間に有意差が認められた。

次に、手伝いのうち特に家事の手伝いに限って、「男の子」「女の子」で区別すべきかどうかを問うてみると、男子の母親では「ウ. 男女の区別はつけない方がよい」が約60%で最も多く、残りの約40%弱が「ア. 男女それぞれ向いた仕事をさせる方がよい」であったのに対し、女子の母親ではむしろ前者が40%強、後者が50%強で、男子母親との間にいずれも有意差が認められた。すなわちこの点に関してはむしろ女子の母親の方が保守的傾向をみせていた。これは、娘が結婚しても困らないようにとの、母親としての配慮が働いたためかもしれない。

次に、以上の3点について、母親が有職か無職かによるちがいを探ってみた。結果は同じく表2に示したように、全般的な意識は両者共ほとんど変わらないようであるが、(2)の手伝いの実態においては、やはり有職母親の方が無職母親よりやや多く手伝わせている傾向が認められた。

次に、同じく家庭生活の実態及び家庭生活についての意識に関して、「夫の家事協力の実態とそれについての考え」を問うてみた。結果は表3に示す通りである。

まず(1)夫の家事協力度度についてみると、「ア.よく協力している」「イ.やや協力している」「ウ.あまり協力していない」「エ.全く協力していない」にほぼ四分され、その点に関しては子の性別による差は認められなかった。

また、(2)夫が家事をすることをどう思うか、についてみると、男子、女子の母親共に約80%までが「イ. 家事は女の仕事だが、主婦が忙しい時や共働きの場合は協力すべきだ」を支持しており、「ア. 一家の主人である男子のすべきことではない」「ウ. 家事も分担して夫もすべきである」という積極的反対または積極的賛成意見に対する支持率は、いずれも10%を割る低率であった。

次に、これを有職の母親、無職の母親別にみると、(1)夫の協力度度については、やはり「エ. 全く協力していない」に対し無職の母親の比率は33%に及ぶ高率を示したが、一方有職の母親は約15%であり、その間に有意差が認められた。しかし(2)夫が家事をすることについての考えでは、両者間に差が認められなかった。

以上「子どものしつけ」及び「夫の家事手伝い」の二点を手がかりとして、家庭における男女役割分担の実態と母親の考え方を探ったのであるが、他の調査報告<sup>1)2)3)4)5)</sup>にもみられるのと同様に、形式的で極端な性別役割分

表3 夫の家事協力度と意識

問	選 択 肢	子の性別		有職, 無職別	
		男 240人	女 237人	有 職 328人	無 職 127人
(1)	ア. よく協力している	18.8%	16.5%	19.5%	13.4%
	イ. やや協力している	30.8	27.4	30.8	23.6
	ウ. あまり協力していない	25.0	27.8	28.0	26.0
	エ. 全く協力していない	20.0	21.9	14.6	33.1
	オ. そ の 他	2.9	3.0	3.4	2.4
	無 答	2.5	3.4	3.7	1.6
(2)	ア. もともと家事は女の仕事であり、一家の主人である男子のすることではない。	3.8	9.2	5.5	8.7
	イ. 家事は女の仕事だが、主婦が忙しい時や、共働きの場合は協力すべきだ	80.8	78.1	80.5	78.7
	ウ. 家庭は夫婦で助け合い二人で築くものだから、家事も分担して夫もすべきである	8.3	8.0	8.5	6.3
	エ. わからない	2.5	0.8	1.5	2.4
	オ. そ の 他	2.9	1.7	1.8	1.6
	無 答	1.7	2.1	2.1	2.4

担意識はかなり薄れてきている反面、男女の特性論にもとづく分業意識は未だかなり強いということが分った。すなわち、「男と女ではやはりちがうのだから」という基本的考えにもとづいて、「男の子、女の子で家事手伝いの種類を区別する」或いは「家事は女の仕事だから主婦が忙しい時だけ夫が手伝えばよい」という意見に賛同する母親が多かったと思われる。一般論ではあるが、男女それぞれ異なった特性を有することは認めるとしても、だからといって子どものしつけや教育、或いは家事への協力までも男女で区別してよいという論理には飛躍があると思われる。その点はわれわれも考えを明確にする必要があるが、それと同時に、このような母親の意識の実態をふまえて家庭科の男女共修を進める必要があると思う。

## 2. 技術・家庭科の男女共修に関する意識

以上のような実態と意識の背景を持った母親たちが、今回の技術・家庭科相互乗り入れの措置をどのように受け止めているのであろうか。それを把握するまず第一段階として、牧野、上野氏らの報告<sup>6)</sup>を参考にして、表4のような8項目の質問を作り、5段階尺度法で回答を求めた。この表の数値は、5点満点で、点数が高いほど男子の家庭科履修に対し前向きな考えであることを示している。これら8項目の平均値をみると、「6, 男女は生まれつき特性があり、興味や関心にちがいがあから、男子は技術的なこと、女子は家庭的なこと、学ぶ内容が違うのは当然と思う」という特性論的区別論に対しては、男子の母親、女子の母親共に3点を割り、8項目中

表 4 技術・家庭科の男女共修に関する意識

項目	子の性別			男子母親, 女子母親間 平均値の検定			
	度数・平均・標準偏差	男		女			
	度数	平均	標準偏差	度数	平均	標準偏差	
1. 衣食住のような人間が生きていくために必要な技術は大切なので、小学校家庭科だけでは不十分であり、中学校でも必要と思う。	232	4.18	0.963	231	4.58	0.763	***
2. 家庭は男女いっしょに築くものだから、家庭生活の理解は必要なので、中学校でも家庭科を男女が学ぶべきだ。	233	4.05	1.035	230	4.24	0.966	**
3. 男性には家族を養う義務があり、女性には家庭を守る義務があるので、男子が中学校で家庭科を学ぶ必要はない。	229	3.61	1.253	230	3.72	1.186	0.964
4. 生活技術を身につけることは男子にとっても大切だが、おとなになれば自然に身につくから中学校時代から家庭科を学習することはない。	228	3.74	1.160	231	3.72	1.249	0.177
5. 最近は共働きの家庭がふえているし、男性もひとり暮らしをする場合が多いので、生活技術を身につけるために中学校でも家庭科を学ぶ必要がある。	227	4.03	1.088	230	4.12	0.994	0.921
6. 男女は生まれつき特性があり、興味や関心にちがいがあから、男子は技術的なこと、女子は家庭的なことと学ぶ内容が違うのは当然と思う。	228	2.60	1.328	224	2.74	1.445	1.070
7. 男子も食物や被服の学習をすれば、女子に劣らぬ知識や技術を身につけることができると思う。	228	3.77	1.153	227	4.00	1.126	**
8. 女子も電気や機械のことを学習すれば男子に劣らぬ知識や技術を身につけることができると思う。	227	3.88	1.097	228	3.97	1.128	0.861

注 \*\* 印は95%の信頼水準で有意差のあるもの、\*\*\* 印は同じく99%の信頼水準で有意差のあるものを示す。

表5も同じ。

では最も低い値を示した。6と同じく男女特性論にもとづく意見としての「3. 男性には家族を養う義務があり、女性には家庭を守る義務があるので、男子が中学校で家庭科を学ぶ必要はない」に対しても、8項目の中では比較的低い値を示した。さきの「子どものしつけ」や「夫の家事手伝い」にみられたのと同じような根強い特性論が、ここにもはっきり表われたのであろう。比較的数値の高いのは、「1. 衣食住のような人間が生きていくために必要な技術は大切なので（後略）」「2. 家庭は男女いっしょに築くものだから家庭生活の理解は必要なので（後略）」「5. 最近は共働きの家庭がふえているし、男性もひとり暮らしをする場合が多いので（後略）」などで、いずれも4点を越える高い数値を示した。これらの項目は、家庭科を生活技術習得の場として、或いは家庭における男女の協力の必要性を教える場とらえての男女共修論であり、このような立場は高い支持を得ていることがわかる。しかし、「4. 生活技術を身につけることは

男子にとっても大切だが、おとなになれば自然に身につくから中学校時代から家庭科を学習することはない」という意見に対する数値は、これらの1, 2, 5に比べて低下しており、家庭科における生活技術の学習に対して、その意義が十分に理解されず、或いは生活技術というものが安易にとらえられていることがうかがえた。また「7. 男子も食物や被服の学習をすれば女子に劣らぬ知識や技術を身につけることができると思う」「8. 女子も電気や機械のことを学習すれば男子に劣らぬ知識や技術を身につけることができると思う」という意見、すなわち男女それぞれの能力の可能性についての認識を問う意見に対しては、6の数値が低い割にはかなり高い数値を示した。すなわち、男子が家庭的なこと、女子が技術的なことをやればやれないことはないけれども、やはり男女で役割分担をする方が望ましいのだとする意見が強いことを示している。

次に、同じく表4について男子の母親、女子の母親で

表5 技術・家庭科の男女共修に関する意識 —子どもと母親の比較及び子—母親の相関—

設 問 項 目	生徒と母親の平均値の比較				子—母親の相関係数	
	男 子	男子母親	女 子	女子母親	男子—男子母親	女子—女子母親
1. 衣食住のような人間が生きていくために必要な技術は大切なので、小学校家庭科だけでは不十分であり、中学校でも必要と思う。	3.47	4.18	4.03	4.58	0.160	0.190
2. 家庭は男女いっしょに築くものだから、家庭生活の理解は必要なので、中学校でも家庭科を男女が学ぶべきだ。	3.26	4.05	3.79	4.24	0.012	0.140
3. 男性には家族を養う義務があり、女性には家庭を守る義務があるので、男子が中学校で家庭科を学ぶ必要はない。	3.00	3.61	3.61	3.72	0.122	0.089
4. 生活技術を身につけることは、男子にとっても大切だが、おとなになれば自然に身につくから中学校時代から家庭科を学習することはない。	3.22	3.74	3.58	3.72	-0.028	0.208
5. 最近では共働きの家庭がふえているし、男性もひとり暮らしをする場合が多いので、生活技術を身につけるために中学校でも家庭科を学ぶ必要がある。	3.55	4.03	3.82	4.12	0.009	0.161
6. 男女は生まれつき特性があり、興味や関心に違いがあるから、男子は技術的なこと、女子は家庭的なことと学ぶ内容が違うのは当然と思う。	2.48	2.60	2.99	2.74	0.090	0.183
7. 男子も食物や被服の学習をすれば、女子に劣らぬ知識や技術を身につけることができると思う。	3.29	3.77	3.75	4.00	0.166	0.028
8. 女子も電気や機械のことを学習すれば、男子に劣らぬ知識や技術を身につけることができると思う。	3.04	3.88	3.59	3.97	0.079	0.246

比較してみると、全般的にみて女子の母親の方が家庭科の男女共修に対して進歩的傾向が強く、特に、1, 2, 7については95%以上の信頼水準で有意差が認められた。さきの家庭における手つだいに関しては、男子の母親の方がむしろ進歩的傾向をみせたのかかわらず、学校における家庭科の学習に対してやや逡巡の色がみられるのは、やはり将来の進路や、進学、受験との関わりを考慮したためかも知れない。

尚、この表4の質問は、これらの母親の子どもたちである1年生の男女に対しても行ない、母子間の比較を試みた。その結果は表5にみられるように、男女共に、ほとんどの項目において母親の平均値の方が子どもより高い数値を示した。すなわち、子どもより母親の方が中学校技術、家庭科の男女共修に対する支持傾向が強かった。このことは、今後家庭科の男女共修を進める上で望ましい傾向といえよう。

また中学1年生のみを男女で比較してみると、すべての項目においてかなりの男女差がみられ、いずれも99%の信頼水準で有意差が認められた。このような認識を持つ男子中学生に対しては、特に家庭生活やその学習の意

義についての理解を与え、学習内容や指導方法にも大巾な検討を加えるなど、家庭科履修にあたっての万全の対策を講じる必要がある。

尚この質問については、母親と子どもの考え方の間にどの程度の関連があるかをみるため、男子とその母親240組、女子とその母親237組のペアについての相関係数を求めた。その結果は同じく表5にみられる通り、さほど大きな数値ではなく、母子間の意見の相似は余り高くないことを示した。しかし関連が全くない訳ではなく、男子で2項目、女子では6項目について有意な数値であることが認められ、僅かながらやはり母親の考えが、特に女子と母親の場合は、子どもにも反映していることがわかった。このことはまた、家庭科の男女共修をすすめるに当って、母親の協力を得ることの必要性を示唆するものである。

### 3. 技術・家庭科「家庭系列」の男女共修に関する意識

以上のように、技術・家庭科の男女共修についての母親たちの意識を、種々の観点より広くとらえてきたのであるが、次には焦点を「家庭系列」の履修に絞り、より具体的な内容を設定して意見を問うことにした。

表6 中学校で男子も家庭科の学習を行なうと聞いたときの反応

反応別	選択肢	子の性別	
		男子母親 (男子生徒)	女子母親 (女子生徒)
A 情緒的 反応	ア. 小学校で男子も家庭科を学習したので別に何とも思わなかった	75.0% (36.4)	68.8% (59.0)
	イ. 中学校では男子は技術科, 女子は家庭科だけと聞いていたので驚いた	11.7 (34.9)	8.9 (27.5)
	ウ. どちらでもない	11.3 (26.4)	18.6 (13.1)
	エ. その他	1.3 (1.1)	2.5 (0.4)
	無答	0.8 (1.1)	1.3 (0)
B 論理的 反応	ア. 好ましいことだと思った(当然だと思った)	65.4 (29.9)	61.6 (43.9)
	イ. 好ましくないことだと思った(男子に必要なと思った)	5.4 (24.9)	5.9 (10.2)
	ウ. どちらともいえない	27.5 (42.5)	27.8 (43.9)
	エ. その他	0.4 (0.8)	0.4 (1.2)
	無答	1.3 (1.9)	4.2 (0.8)

まず、「中学校で男子も家庭科の学習を行なうと聞いたときの反応」について問うてみると、結果は表6に示すように、男子の母親、女子の母親共に大多数は冷静に受止めており、「驚いた」或いは「好ましくない」と感じた者はごく少数であった。また、同じような質問を生徒にも行ない、母親グループと比較してみたところ、「驚いた」或いは「男子に必要な」と答えた者の比率も、「どちらでもない」と答えた者の比率も、生徒グループの方がかなり高かった。このことはさきにも見たのと同様、男子の家庭科履修に対する中学生の関心や認識が、母親たちに比べて低いことを示すものといえよう。

尚この結果を中学生男女で比較してみると、ここでもやはり男子の方が男子の家庭科履修に対して消極的反応を示す傾向がみられた。

次に、「子どもに学ばせたいと思う家庭系列の領域は何か」を多答式により問うてみた。その結果は表7の通りである。すなわち「食物領域」はⅠ, Ⅱ, Ⅲのいずれも、男子の母親、女子の母親共にかなり支持率が高く、約40~60%の数値を示した。男子の母親では「食物領域」に次いで「住居領域」の支持率が高く、約40%を示

表7 子どもに学ばせたいと思う家庭系列領域(多答式)

領域	内容	男子の母親	女子の母親
被服Ⅰ	スモック作り, ミシンの使い方など	16.3% *	48.9% *
被服Ⅱ	スカート作り, 日常着の洗たくなど	14.2 *	54.9 *
被服Ⅲ	パジャマ作り, 手芸など	3.8 *	42.2 *
食物Ⅰ	青少年の栄養及び日常食の献立と調理, 食品の栄養的特質など	58.3	57.8
食物Ⅱ	青少年の日常食の献立と調理, 食品の品質表示, 食品添加物など	52.9	46.0
食物Ⅲ	成人の栄養及び日常食の献立と調理, 食費と生活費との関係など	35.8	43.5
保育	幼児の心身の発達, 幼児の遊びを中心にした生活など	11.7	17.7
住居	調理, 食事, 団らんのための空間の機能や家具, 室内の環境と設備など	39.6 *	26.6 *
その他		4.2	2.1
学ばせたいものはない		6.7	2.5
無答		4.6	1.7

した。一方女子の母親のそれは27%であり、その間に有意差が認められた。また「食物領域」「住居領域」に比べ男子母親の「被服領域」支持率はかなり低く(4~16%), 女子母親の高率(42~55%)なのに比べ対照的であった。また「保育領域」の支持率は男子母親約12%, 女子母親約18%で、共に低率であった。

以上のような結果は、前にも述べたように、「男女は生れつき特性があるので、学ぶ内容がちがうのは当然」という考え方がかなり支持されていたことからみて予想された結果であり、そのような考え方の具体的表われといてよいであろう。そしてまた大多数の母親は、家庭科を「生活技術を身につけて将来役に立つ」実用的教科としてのみとらえているふしがみられる。生活技術の習得はもちろんであるが、さらに深く、広く、家庭生活やひいては人類全体の福祉をも考え、且つそのための実践力をも備えた、生活者としての国民の育成を家庭科がめざしていることを、従って家庭科は男女共に学習すべき価値を有し、また男女の相互理解と協力の必要性を身をもって体得するためにもそれは必要であることを、母親たちにも理解してもらいたいと思う。そして、それと同時に、理想とは余りにもかけ離れた家庭科教育の現状を認

識し、今後進むべき方向を見定めながら、一歩ずつ前進して行く努力を続けなければならないと思う。

者の1年生及びそのお母様方に対し、心より厚く御礼申し上げます。

## 要 約

中学校技術・家庭科の男女相互乗り入れという新事態に対処し、その指導効果を高めるための資料としたいと考え、松江市内2校の中学1年生及びその母親を対象として、技術、家庭科の男女共修に関する意識調査を行った。その結果を、母親を中心として考察し要約すると、次の通りである。

- 1) 家庭生活に関して、「子どものしつけ」及び「夫の家事手伝い」の二点より、男女役割分担の実態と母親の意識を問うたところ、形式的な性別分業意識はかなり薄れているものの、男女の特性論にもとづく分業意識は未だかなり根強いことがわかった。
- 2) 中学校技術・家庭科の男女共修に関して、種々の観点より母親の意識をみると、全般的には家庭科の男子履修に対する支持は強く、特に男子の母親より女子の母親の支持傾向が強かった。しかし、1)でみられたのと同様の、男女の特性意識にもとづく内容区別論に対する支持もまたかなり強かった。
- 3) この問題に関して中学1年生グループと母親グループとを比較してみると、男子の家庭科履修に対する支持は、男女共に母親グループの方が強かった。また子一母親間の意識の相関が僅かではあるが認められた。
- 4) 技術・家庭科「家庭系列」の男子履修に対する母親の反応としては、比較的冷静且つ好意的に受止めた者が多かった。これに対し、中学生の反応は、母親グループに比べ保守的、または無関心の者が多い傾向がみられた。
- 5) 母親が子どもに学ばせたいと思う「家庭系列」の領域としては、男子の母親、女子の母親共に「食物領域」の支持率が最も高かった。「被服領域」については特に、また「住居領域」においても、両者間に差が認められ、やはり男女の特性に応じた学習を望む傾向がみられた。
- 6) 全般的にみて、母親たちは家庭科を単に生活技術の習得をめざす実用的教科とのみとらえている傾向が認められるので、家庭科学習及び家庭科の男女共修の意義について、さらに母親たちの理解を得るための努力が必要と思われる。

最後に、この調査研究のため快くご協力下さいました松江市立第三中学校、同湖南中学校の諸先生方と、対象

## 引 用 文 献

- 1) 内閣総理大臣官房広報室：婦人に関する意識調査（昭和47年実施）、婦人の歩み30年、労働省婦人少年局、p.20、(1976)
- 2) 内閣総理大臣官房広報室：婦人に関する世論調査Ⅰ（昭和54年実施）、昭和55年版世論調査年鑑、大蔵省印刷局、p.122、(1981)
- 3) 同上：婦人に関する世論調査Ⅱ（昭和54年実施）、同上、同上、p.167、(1981)
- 4) 太田昌子、永田七恵：男女平等に関する大学生の意識とその形成要因、島根大学教育学部紀要（教育科学）、第11巻、p.87、(1977)
- 5) 島根県商工労働部：婦人の生活実態と意識に関する調査（昭和54年10月実施）、p.11～15、(1980)
- 6) 牧野カツコ、上野知子：技術・家庭科の男女共学についての中学生の意識、技術・家庭科の男女共学をどうすすめるか、家庭科の男女共修をすすめる会、p.26～29、(1979)